

クリスマスメッセージ

マリアの歌

柳下明子 (日本基督教団教師、日本聖書神学校教員)

そこで、マリアは言った。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人にもわたしを幸いな者と言うでしょう、力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

(ルカによる福音書 1章 46～55節)

「マリアの賛歌」はマニフィカト(各国の言語によってはラテン語表記に従ってマグニフィカトとも)と呼ばれ、教会の中で大切にされてきた歌です。グレゴリオ聖歌に始まり、さまざまなメロディと共に歌われることの多い曲です。その名の由来ともなっている歌詞は、ルカによる福音書 1章に伝えられています。

マリアは天使から自分が妊娠していると伝えられ「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」(1・34)と応えます。天使は「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」として、そのマリアの想定外の妊娠について説明します。その証拠に、マリアの親戚で長い結婚生活の間「不妊の女」と呼称されていた年を重ねた女性エリサベトも妊娠している、これらは皆神の力によるものだ、と。マリアはエリサベトを訪ね、天使が自分に語ったことが事実だと知ります。

そして、マリアが言った言葉が、いわゆる「マリアの賛歌」として伝えられています。その内容は、代々キリスト教の教会で歌い継がれてきたとおり、神をたたえるものではありませんが、その神が人間にもたらす

ものは^{せいひつ}静謐な安らぎに満ちたものとは言えません。

「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き下ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返します」このようにマリアが歌う神は、人間の世界に広がっている権力者の不正をただして、経済的格差に苦しむ人を救い出す神であり、社会の支配制度をひっくり返す神なのです。

聖書が書かれた時代の常識で言えば、未婚の「男を知らない」女性と設定されているマリアは、おそらく十代半ばの女性です。想定外の妊娠を身に引き受けざるをえなくなった十代半ばの女性は、古代中近東の常識では社会の非難と排斥にさらされることは予想できることです。けれどもマリアは自分の人生にこれから起こることを、ただ自分の困難としてのみではなく世界を変革することと結びつけて語るのです。どのようにしてマリアはこのような歌を歌うことができたのでしょうか。

ルカによる福音書の中で、この出来事が起こる前には、エリサベトの配偶者ザカリアに対して天使があらわれています。天使は、エリサベトとザカリアの間に子どもが生まれることを伝え、その子どもは神から特別な役割を与えられた者であるといいます。成長すると救い主キリストのために道を備える者になる子どもが、誕生するのだと。古代の中近東の社会では、子孫を残し家系を存続させることが個人に存在の意味を与えるものでした。エリサベトとザカリアの間には子どもが与えられず、その意味ではエリサベトという女性は聖書の中で「不妊」という言葉を付されることで、生きているのにその存在の意味がないもののように扱われてきた女性です。そのような女性が生存を取り戻させられるのが、この誕生の約束です。マリアはそれを知りました。そして女性を生きながらも生きていないもののように扱う、古代の中近東の社会の常識を乗り越えさせる神の力を信じることができました。それを手がかりにマリアが望むのは、女性を産む性に縛り付け、その範囲でのみ評価を与える価値を乗り越える以上のことです。

だからこそ、マリアは個人の苦難の経験を超えて社会を変革してゆく力を願い求め、神をたたえることができたのです。今を生きるわたしたちもまた、キリストを待ち望む季節にマリアの賛歌を歌い継いでいかななくてはならないでしょう。